

# やさしい地質学 ⑨

## 生物は進化する(4)

岸本文男

前章では 私たちと同じ人類 知的人類 (Homo sapiens) が洪積世の最後の時期—上部洪積世に生れたことまで触れましたね。

時は1868年。 フランスのクロ・マニヨン洞窟から鉄道工事の際に偶然発見された人骨を出発点として 次々に見出された人骨や動物の骨・牙そして石器や貝殻製首飾りなど。 これがクロマニヨン人 (Cro-magnon) とその生活の跡でしたね (第94図)。

彼や彼女たちは ヨーロッパ・アジア・アフリカ・南北アメリカなどにわたって生活していました。 それはクロマニヨン人たちのなきながらや生活の跡が それらの地方から見出されることから よくわかります。 この人たちは 先のネアンデルタール人とは比べようのない位の立派な石器や骨細工などのいろいろな芸術作品を残しています。 彼らの残した文化は その初めころのものをオーリニアック文化 中間のころをソリュートレ文化とよび そして 洪積世文化の最後の光といわれているマドレーヌ文化に到達しています (前章第93図)。 これからは 沖積世初期の中石器文化にとって代わられることになります。

紙数の節約上 急いで日本に目を移しましょう。

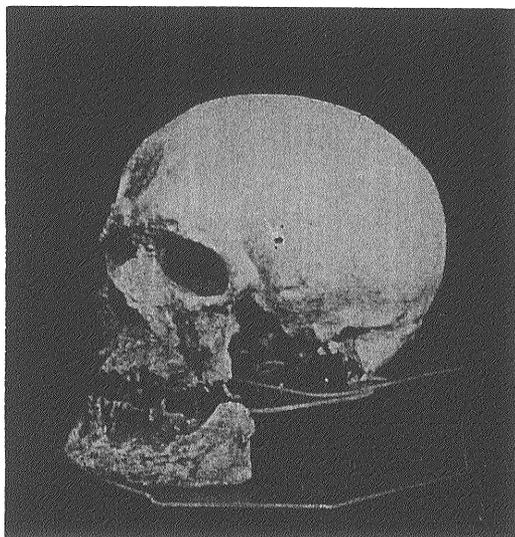
さて 洪積世の日本に人類が住んでいたのでしょうか。 そうです。 住んでいました。 それも ヨーロッパの例にみられるような洞窟の中や河岸段丘の礫層の中ではなくて 今まで誰1人 火山灰の降り積った土層である

からとして注意を払わなかった関東ローム層の中に 古い時代の日本の人類が 彼らの作った石器や生活のあとを残してしてくれたのです。 さすが火山国日本らしい話ですね。 その発見は 1959年 今から5年前の桐生市郊外の岩宿<sup>いわしほく</sup>においてのことです (第95・99図)。

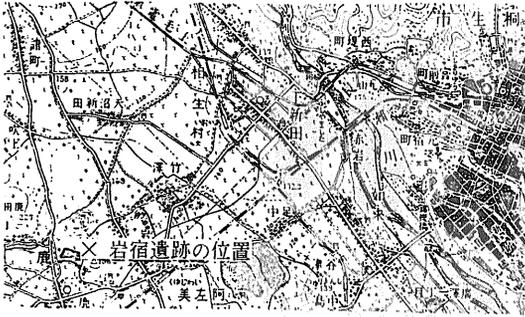
明治大学考古学研究室の発掘調査によって 興味ある事実が明らかにされました。 それにはこう述べられています。

「縄文時代早期の土器をふくむ層は黒色の表土層にかざられ その下層の赤土の中に いままで縄文時代には見たことのない形の石器をふくむ層が 上下2層にわかれてはさまれていた。 しかも それらの層の中からは まったく土器を発見できずしたがって それらの石器は まだ土器をつくることを知らない人々が残したものであることがわかってきた」と。

このような事実がわかる前には 明治38年来 幾らかの学者の間で 洪積世の住民の生活の跡があるかないかについて いろいろ意見がかわさっていました。 とくに1931年には 兵庫県の明石の海岸から人間の腰骨の破片が採取されましたが これが直立猿人や北京原人に匹敵する古い人類のものだとして発見後20年たってからニッポナントロプス・アカシエンシス (Nipponanthrops akashiensis) と命名され 大きな論議を呼びました。 (第96図)。 しかし 1949年に発掘調査がされましたが かつて発見された人骨を産出した地層が確認できず し



第 94 図  
クロマニヨン人の模型  
(国立科学博物館蔵)



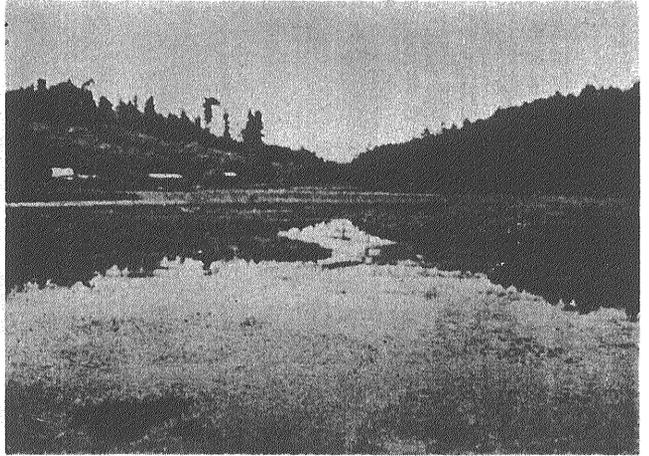
かも新たな標本も得られずじまいになって 結局のところ 現在もナゾのままになっています。 筆者もこの調査に加わりましたが 願っていたような成果もなく 金もなくなって ガッカリして引き揚げました。

そこへ 1959年の岩宿遺跡の発見となったのですからこれをきっかけとして考古学会は湧きたち 地質学者の協力の下に 新発見の石器文化—無土器文化—の究明にのりだしました。 赤土の層の中も 河岸段丘の粘土層の中も 洞くつに堆積した堆積物の中も探られました。そして……東京板橋の茂呂 長野諏訪の茶臼山 それから瀬戸内 北海道 九州へと無土器文化の跡があいついで発見されて 現在までにその数は数10に達しています。

これらの遺跡のほかには 1954年には 栃木県葛生の石灰岩採石場からネアンデルタール人に相当する人骨がまたごく最近には 愛知県牛川と静岡県三ヶ日<sup>みつひ</sup>の各石灰岩採石場の洪積世末の地層から人骨が それぞれ発見されて 目下研究が続けられています。 ところが面白いことには 両化石人とも 石器を使っていないことが明らかになりました。 無土器文化の文化人たちの世界とまったくの猿人とのつなぎ目を担った人たちなのでしょうか。 今後の研究結果の待たれるところです。

このように 考古学者たちの研究が活発になりましたが それにともなって 地理学者や地質学者の間で 以上の人骨や石器などを出土したローム層そのものの研究が とても活発になってきました。 しごく当然のことでしょう。 いわゆる物事が 自然に発展するよりも 相互に関係をもって 刺激し合ってジグザグに発展してゆくというよい例です。

さて 今までの関東ローム層 ～ 皆さんが関東地方のいたるところで目にされる粘土の層 冬になると霜柱を楽しんだり 不平をいったりするあの赤土 ～ の研究の結果は上から下まで一様にみえるこの関東ローム層が 幾つかの層の細分できることを教えています。 そしてこのローム層は 洪積世の中頃から終りまでの長い期間



第95図 岩宿遺跡（無土器文化の最初の発見地）

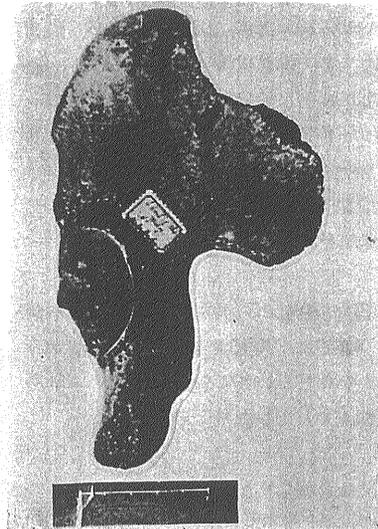
にわたって断続して堆積したことがわかりました。 今では南関東では4つに区別されて 古い方からそれぞれ多摩ローム 下末吉ローム 武蔵野ローム 立川ロームとよばれ古い石器は この中でも立川ロームに限って発見されています。

北関東では3つに区分されて 同じく古い方から 下部ローム 中部ローム 上部ロームとよばれていますが 古い石器の発見されるのは 中部ロームと下部ロームの部分です。

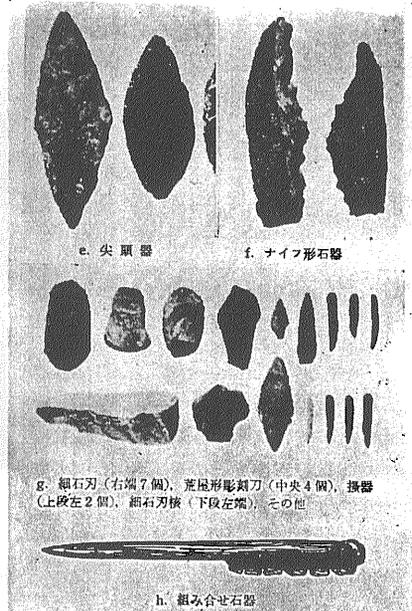
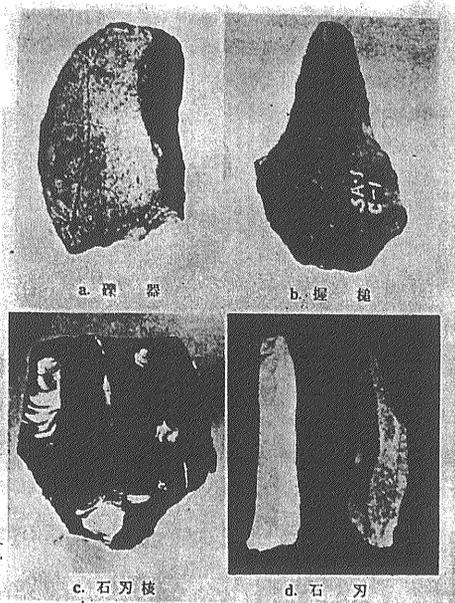
火山が何回か爆発して盛んに火山灰を降らすような時代にも きびしいながらも 人間の生活できる環境があったのです。 もちろん 人間の集団的な知恵が生活環境を改善していったのに違いありませんが、

そのころの人々の生活をのぞいてみましょう。

まず考古学者は この無土器文化の時代を 使っていた道具からみて 古い方から次の4つの時期に分けて考



第96図  
明石原人  
(早大直良  
教授提供)



第97図  
石器の  
いろいろ

えています (第97図)。

- 1) 礫器や握槌をつくった時期
- 2) ナイフ型の石器を特徴とする時期
- 3) 尖頭器を主体とする時期
- 4) 細石器の時期

この4つの時期を大陸の石器時代にあてはめるとその旧石器時代と中石器時代とに相当しています。地質時代からいうと 1)~3)は洪積世 4)は洪積世の終り頃から沖積世の初めころに当たります。

1)の時代に相当する遺跡としてはっきりしているのは群馬県に3カ所あります。新里村の不二山 伊勢崎市の権現山 そして前述の岩宿の各遺跡がそれです。その中で もっとも古いものは不二山遺跡ですが 出土した石器は 安山岩と玄武岩を材料にしています。その石器の表面はかなり風化していて その古さを物語っています。出土した下部ローム層は 10万年よりも前に堆積したもので その状態からみますと ヨーロッパの先住人類の住居のような洞窟ではなく 開けた台地ですが 住居らしい跡などはまだ見つかっていません。

岩宿第1層とよばれる地層から得た握槌は 青味がかかった頁岩で作られ 権現山の握槌は 中部ローム層から出土し 数万年前のものといわれています。いずれもどんな生活だったかは よくわかっていません。

2)の時期の石器は かなり進歩した技術によるもの

で 時代と場所によって 少しづつ 形も材料も異なっています。北海道・東北・中部地方にかけては彫刻刀型のもの 関東・中部以西ではナイフ型の石器とわかれているようです。

この時代の古人たちは 彫刻刀石器で骨・石・木をほったり 削ったりしていましたし 遺跡からみますと 径10cm 位の河原の礫を集めて 石器作りをやっていたようです。まだ洞窟生活ではなく 台地に住んでいました。

その石器の材料は 北海道では黒耀石 東北では硬質頁岩 中部以西では 安山岩がもっぱら用いられているおもなものです。

3)の時期の石器(第97図)は ごらんとおりの槍先形のもので 北関東から中部山岳地帯にかけて とくに



第99図 八ヶ岳東ろく矢出川遺跡付近 (波瀬元子氏撮影)

よく出土しています。群馬県の元宿遺跡でみますと上部ローム層の中の2枚の浮石層にはさまれた部分から出土しています。1万年前までの時代です。

この石器の材料は おもに 黒耀石・安山岩・頁岩・水晶・チャートです。

この尖頭器とともによく出土する搔器(第97図)・石錐・削器・彫刻刀などの石器から考えると 小動物などを殺し 皮をはいで着たり 肉を削って食べたり また木の実をつぶしたりしていたように思えますが たしか生活の状態はよくわかっていません。

4)の時期になりますと 生活の様子がかなり判ってきました。この時期は 約1万年前から9000年前まで1000年間ほどに当たります。

この時期の代表的な石器である細石器は 木・骨の側面に溝を掘って細石刃などははめこみ 樹脂やアスファルトで固定した組合せ石器(第97図)です。

日本の細石器は 最近の発見で明らかになったのですが その最初は 八ヶ岳東麓の矢出川遺跡でした。黒耀石をおもな材料とした1000個ばかりの細石器がローム最上部ないしローム直上面から出土したのです(第98図)。

ですから 洪積世の最終末 約1万年近く前のものと思われる。この石器は銚や短剣 ときには鋸や鎌として使われ始めたものらしく アフリカやシベリアからこのような細石器が木や動物の骨にうちこまれたままの状態出土した例もあるくらいです。

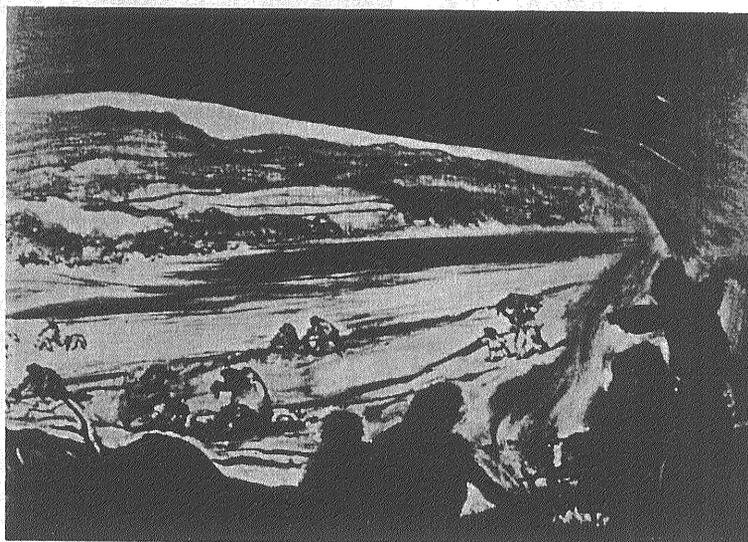
この矢出川遺跡は洞窟ではなくて丘陵地です。しかし 長崎県の福井洞窟(第99図)からは同じような細石器がたくさん出土して 九州も注目されるようになり とくに 日本では珍しい古い洞窟なので ゆきとどいた調査が行なわれています。福井洞くつでの古人たちの生活は それで よくわかってきました。第100図をみて下さい。これが彼らの生活の1部なのです。この時代の私たちの先祖は 石で作った銚や槍を使っての狩猟生活 最後の氷期は峠をこしたとはいえ まだ相当に寒かった中で 男も女もすべてが働き 私有財産を認めず 泥棒もいない社会生活 労働にすぐれた男と女が ひきあう愛の生活を営んでいました。

さて 次にくるもの それが縄文土器の時代とその文化を作り上げた人々でしたが そろそろ話を次に移すために 他は考古学者にゆずることにしましょう。

(筆者は 鮎床部)



第99図  
福井洞くつ(無土器時代末期の洞くつ住居の典型的なもの)



第100図  
洞くつの生活  
(旧石器時代の末期  
今から約1万年前から  
約9,000年までの約1,000年間  
このような生活がつけられた)  
[図説:地球の歴史から]